

「裸の王様」

先日、近いうちに結婚を予定している友人から、次のような話を聞きました。彼は、結婚式・披露宴の会場となるホテルを選ぶため、色々な式場を紹介してくれる相談所に行ったそうです。その時の友人と相談員との会話を聞いてみましょう。

相談員は、「ホテルは一年前からご予約ができます。土曜日や日曜日ですと、少しでも早くお決めになりませんか、ご希望通りにいかないことがあります。ご予約はいつ頃ですか。」と尋ねました。友人は、「だいたい来年の〇月〇日頃を考えているのですが・・・」と言うと、相談員は来年のカレンダーを見て、「土曜日ですね。あっ、この日は仏滅ですよ。」と言いました。すると友人は、「僕はそういうことは別に気にしていませんから」と。相談員はげげんな顔をして、「仏滅でしたら空いていますので、多少遅くなっても予約できますよ。」と。相談員、は結婚式に仏滅を避けるのは当然という思い込みがあったようです。そして、実際土曜日や休日でも仏滅を避ける人が多いですから、空いていたのでしょ。

最近、キリスト教の教会を併設する結婚式場が増えているそうです。大安とか仏滅とかの日にこだわりながら、教会で式を挙げる滑稽さに気付くこともなく、それでも誰かの命日には「なんまんだぶ」と手を合わせている裸の王様が、この国にはあふれています。

「坊さんはどういうか知らんが、世間がすることはしといた方がええ。世間があかんということはやめといた方がええ。」という声を時々耳にします。世間という言葉で表される不確かなものを、裸の王様たちはあたかも歪むことのない定規のように振りかざします。裸の王様は、周りがみんな裸であることに安心してそのまやかしと滑稽さに慣らされ、やがて自分を縛るようになっていきます。

しかし、人生や生き方は多数決では決まりません。数が多いから正しい、とは言えないのです。

「世間が・・・」という「世間」とは何と不確かな世界なのでしょう。そして何と無責任な世界でしょう。私たちはみんな、そのような「世間」とは、別の世に生きているように思っています。しかし、どっぴりとその中につきり、支えているのは紛れもなくこの私なのです。仏教徒の真似事をしながら、心の中では別のものを拝んでいる姿は、新聞を賑わす「世間」とは関係ない顔をしながら、その実「世間」の根底を流れる悪習や意識を支えている姿に等しいではありませんか。まさに裸の王様は私自身なのです。